

EBM Promotion in Vietnam

ベトナム・ホーチミン市医科薬科大学に
おける疫学研修プロジェクト



報告書

2015 年 8 月

初日の概要（8月2日）

コースへは119名の登録があった。うち15名がホーチミン市以外からの参加であった。本コースは昨年度の研修の応用編であるため、多くの参加者が昨年から引き続き参加した。

コースは Audit Course と Project Course に分かれており、Audit Course は講義のみへの参加、そして Project Course は講義に加えて、グループワークへの参加が求められる。講義およびディスカッションは共通して英語が用いられたが、一部の英語が理解できないベトナム人参加者のために、ベトナム語への翻訳がなされた。また、ベトナム語の内容は、日本人講師・参加者に対して部分的に英語で通訳がなされ、意思疎通を図った。

本講義の構成は、午前中に基礎的な内容について講義が行われ、午後には演習とグループワークであった。初日の午前中はコースの概要について後藤講師が説明を行い、また、統計の基本概念と統計の基本的な検定について Vinh 講師が講義をした。午後は Khoa 講師がエクセルへのデータ入力についての演習を行った。グループワークでは、昨年度に研究計画をした4グループを中心に進められた。

プロジェクトはつぎの通りである。

- Association between depression and blood sugar control among elderly patients with Type 2 Diabetes Mellitus
- Evaluation of the quality of life by SF-36 score in elderly patients with Type 2 Diabetes Mellitus
- Clinical and para-clinical characteristics of diabetic inpatients with nephropathy at Bachmai Hospital
- Blood donation interval for Vietnamese palate donors: Comparing 2, 3 and 4 weeks

（黒田 佑次郎）

初日の感想

過去に本プロジェクトでトレーニングを受けたベトナム人受講生が、今回の講師となり、つぎの世代の医学生・医師に知識と技術と伝達することに、本プロジェクトに意義がある。また、昨年度よりグループワークを進めていた共同研究者が、今年は病院業務のために参加できず、進められなかったのが残念であった。（黒田 佑次郎）

Vinh 講師の生物統計学の講義は、重要事項をレビューするものであった。私の語学力不足のため、講義のベトナム語の部分は理解が困難であったが、ヒトに応用する際に重要な統計上の概念は何か、を伝えることに重点をおかれていた。私は、生物統計は生物の集団を捉える臨床研究の根幹であると再認識した。Khoa 講師の講義では、Excel 入力のコツが伝授され、実践的であった。

進行中の臨床研究 4 件について、ベトナムと日本の研究者の議論を傍聴した。臨床研究の進行途中には、計画時にはわからなかった遂行上や解析上の問題を抱えてしまうことは、自分の経験からも頷ける。ベトナムと日本両国の、研究当事者と非当事者双方にとって、研究上の具体的な議論に参加できることは非常に実用的であり、研究意欲を向上させたと思われた。(伊関 千書)

日曜日なのであまり人数は集まらないかもしれませんが、という説明があったけれど、始まってみればかなりの人数で会場は満員。後藤講師のあいさつ後はすべてベトナム語での授業であり、ベトナム語はまったく理解できなかったが、講師の熱意は十分に伝わってきた。会場のみなさんもととても熱心に聴講されていた。講義内容は短時間でかなりの情報量であり、私自身が吸収しきれなかった部分も多いのが残念であった。講義後のグループワークでは 1 年前に活動を開始したグループのうち、現在進行中の 4 つのグループの話合いが行われた。どのグループも熱心で、進捗状況、今後の課題等を積極的に話合っており、大変刺激を受けた。(知識 美奈)



受付の様子



後藤講師の研修概要の説明



グループワークの様子①



グループワークの様子②

二日目の概要（8月3日）

午前中は、ホーチミン市医科薬科大学の国際交流部門の Trong 講師による挨拶から開始となった。Trong 講師は、今回の研修の母体となる 15 年前のベトナム疫学研修初期から参加されているとのことで、今回の参加者にも大いに励ましの言葉を述べられた。

続いて、後藤講師による「データの取り扱いと記述統計」についての講義では、データセットの作成、チェック、クリーニング、作表や、記述統計について解説があった。引き続き、参加者が持参のパソコンで Excel を用いて一連の作業を行い、データから平均値や作図結果を用いて記述統計することも実習した。後藤講師は、t 検定等の各種検定方法についても解説し、特に相関と回帰の概念の違い、検定の結果から対象の関係性をどのように捉えるかという重要な事項について、講師と参加者の間で双方向性の議論があった。

午後は Tran 講師がベトナム語にて、統計ソフト SPSS の使用方法について解説しながらの実習を行い、参加者は実際に統計ソフト上でのデータの取り扱いや検定について体験した。後藤講師は、サンプルサイズの推計ができるフリー統計サイト Open Epi について紹介した。

最後には 1 日目に引き続いてのグループワークが行われ、参加者は今回のコース中にも統計学的実践力が高まり、研究への意欲が向上しているように見受けられた。

（伊関 千書）

二日目の感想

私はこれまで検定ソフトを使用したこともあったが、今回の実習で改めて勉強になった。特に、SPSS などのソフトでの作業に囚われ、「研究が何を目的としデータを整理し

検定を行っているのか」を忘れ、検定に終始してしまいがちになることが、私を含め初習者にありがちな傾向であると再認識した。(伊関 千書)

本日は実際に自分のPCでデータ入力、検定等を行いながら講義が進められた。データを入力してすぐに検定をしてしまいがちだが、なんのために検定をするのか、その本質をよく理解して行うことが重要であることを教えていただいた。まだまだ不十分ながら、少しずつ力がついていることを実感できた1日だった。(知識 美奈)

より発展的な学習をするためにホーチミン市郊外から通っている参加者がいた。その一方で、Excelでグラフを使うことから学習を要する参加者も散見され、参加者の修得度にはバラツキがあることが観察された。それに対し、グループワークの最中に、ベトナム人講師がフォローアップをしている様子が見受けられ、効果的であると感じた。今後は参加者の修得度にあわせたプログラムが必要と考えられる。(黒田 佑次郎)



Trong 講師からの挨拶



ベトナム人講師による演習の様子



グループワークの様子①



グループワークの様子②

三日目の概要 (8月4日)

コース3日目は前日までとは会場が異なり、常設の椅子がある講義室で行われた。午前中は横川講師による臨床疫学研究についての講義。実際に臨床の現場において、何を知

りたくて、どのように仮説を立てるか、そして最終的にどのような目的を達成するべきなのか、それを踏まえた上で必要となるデータを選択し、適切な解析を行うことが重要であることを教えていただいた。実習の時間となると、おのおのがエクセルを駆使してデータの解釈、まとめ、解析を行った。会場では参加者たちの意見が飛び交い、自分達のもてる能力でいかに解析を行うか、実際に手を動かすことで各自有効な学習ができていた印象であった。

11 時から後藤講師、Lai 講師、伊関、知識は Blood Transfusion Hematology Hospital (BTH)を見学させていただいた。新築されたばかりのようで、建物は新しくきれいであった。まず一通りの施設の説明をしていただき、また当コースで現在進行中の疫学研究 Blood donation interval for palate donors: Comparing 2, 3 and 4 weeks. での実際の流れも説明していただいた。ホーチミン市では献血の不足はほとんどないそうだ。100%ボランティアによる献血で、献血を行うとスタンプをもらえ、それが多いと病院受診の際に優遇されるというシステムがあるとのことだった。

午後は今年退官される Trong 講師の Survival analysis についての特別講義。大変熱のこもった講義で、講義後にはフロアからの質問も多く、ディスカッションが活発に行われた。最後のグループワークでは各班がこの数日でさらに内容を詰めることができている様子であった。

(知識 美奈)

三日目の感想

このコースすべてを通していえることだが、講義は一方向性ではなく、双方向性を保てており、短期間のコースであるが、大変充実した学びを得られると感じた。また昼に BTH 見学をさせていただき、日本における慢性的な血液製剤不足と比較して、ホーチミン市で十分な献血を確保できているという事に驚かされた。(知識 美奈)

横川講師の講義は、内容はもとより、通訳者を交え聴講生の質問に丁寧に答えながら進行していたため、理解が深まったと思う。Trong 講師は、後藤講師の 15 年前の臨床研究講座から統計などの勉強を重ね、本年退職にあたり記念講義をされた。臨床研究を学び、共有しようとする姿勢こそ、私が見習いたいと思うことである。(伊関 千書)

グループワークでは、受講生が実施したパイロット調査の結果について、集計・分析を進めた。グループでは習得した高度な統計技術を用いる意欲が強い。しかしながら、研究の目的や集めたデータの特性に立ち返り、基本的な統計とそれを丁寧に読み解く、そしてその結果・考察を公開するという視点も重要だと考え、残り二日のグループワーク

でこの点を強調していきたいと思った。(黒田 佑次郎)



横川講師の講義



横川講師による演習



BTH への見学



Trong 講師の講義

四日目の概要

午前中は、鹿児島大学の郡山千早講師による「バイアスと交絡の取り扱い」の講義から始まった。バイアス、エラー、Misclassificationといった概念について、またその具体例や対処法について解説があった。続いて、統計用ソフトウェア STATA や Open Epi を用い、Mantel-Haenszel 検定により、統計学的に交絡の影響を考察する実習を行った。聴講生との質疑応答場面では、ベトナム人講師陣は、通訳にとどまらず、具体例を加えたり解説を変えたりしつつ活発なサポートが見られた。

午後には、シンガポールから招かれた Lai 講師により、「学術英語論文の書き方」についての講義がなされた。読者を惹きつける学術論文のコツとして、正確さ、文態に変化を持たせること、時制、結果の提示にて統計値を示すだけとはしないこと、など 10

個のポイントの提案があった。悪文を改訂する実習をいくつか挟んだ。なお、Lai 講師は、論文の執筆以前に論文の構想が基本となることも強調した。Lai 講師の講義の構成、英語スピーチ自体が聴講生を惹きつけるものであった。Khue 講師の通訳も、同様に熱心なものであった。

最後には短時間ではあったが、3日目となる臨床研究グループワークが行われ、明日にグループごとの発表を控えているため、講師と参加者との間で統計データの解釈等について確認が行われた。

(伊関 千書)

四日目の感想

今回のプログラムが、ベトナム人講師陣の大きなサポートにより、ベトナム語使用者にとってわかりやすくなっているように思われる。ベトナム人によるベトナムの人々のための講習会となってきた面が、一方向的な(日本⇒ベトナム)支援とは違っており、素晴らしいと思う。(伊関 千書)

午前の郡山講師の授業では理解が不足していた、バイアスと交絡因子について定義の部分から再確認することができた。午後の Lai 講師の授業では体を動かして目を覚ましつつ、実際の文章を用いて、より簡潔で魅力的な文章に校正するスキルを学んだ。日本語においてもそうだが、相手に物事を伝えるにあたり、こういったスキルは非常に重要であると再認識した。(知識 美奈)

Lai 講師の特別講義が印象的であった。講師は行動科学と公衆衛生をバックグラウンドとしており、“Ten tips for effective academic writing” についての講義であった。ベトナム人参加者も大きな関心を寄せており、研究によって得られた成果を、社会とどのようにコミュニケーションしていくかという視点が極めて重要だと感じた。また、参加者を惹きつける「場の作り方」も工夫しており、具体的には参加者の席をシャッフルして、グループワークをするなど、Active Learning のあり方を学んだ。(黒田 佑次郎)



郡山講師の講義



Lai 講師の講義



Lai 講師による演習



グループワークの様子

五日目の概要

午前は福島オープンセミナー2015 が開催された。福島から用意して持参した福島パンフレットとお土産の桃キャラメルを参加者に配布。馬目講師、黒田講師、安村講師が東日本大震災とその後の福島の状況、現在行っている政策、今後の課題等につきわかりやすく説明して下さった。ベトナムの方たちにとって、大震災や福島についての情報はメディアで伝え聞くものがほとんどであったと思われ、今回のように直接現在の様子を聞く機会は貴重だったようで、参加者の方たちはとても興味深そうに聴講されていた。11 時半からは今回のコースの締めである試験が行われた。問題は講義内容に則したものであり、英語の読解が困難であった部分もあるが、講義内容を再確認できるものであった。

午後は各研究班のプレゼンテーションが行われた。各班が1年前から本日までに研究方法の検討、データ収集、解析を着実に進めてきており、充実した内容であった。フロアからの質問も多く、各班で活発なディスカッションが行われた。時間に制限があり、ディスカッションしきれなかったことが残念であるが、今後の課題、さらなる検討なども考察されており、1年前のグループワークからここまで仕上げてきた参加者の熱心な

姿勢に大変驚かされた。

最後は試験での優秀者発表が行われ、発表されるたびに大変盛り上がり、コースを修了した充実感もあり、参加者の顔がとても輝いていたことが印象的であった。

閉会の際にはこのコースの意義と、これからにつなげ、今後も両国間での協力を継続し、さらなる発展につなげていってほしいという講師陣の思いが参加者に伝えられた。参加者同士で“See you next year!”と言っているのを聞いて、このコースがいかに参加者、主催者、講師陣などすべての人にとって大変意義のあるものであったかが、再度強く感じられた。(知識 美奈)

五日目の感想

本日はとうとうコース最終日。最初は長いと思っていたが、あっという間に最終日を迎えてしまった。どの講義も大変内容が充実しており、統計の知識が皆無に等しかった私が試験を受けられるまでに成長したことからも、このコースの充実度が伺える。終了後の参加者たちの達成感を感じられる笑顔がとても印象的であった。(知識 美奈)

福島オープンセミナーを聴講することは、福島県民である私にとっても新鮮な体験であった。福島県民として見聞きし尽くした感のある情報であっても、それを外部、殊に他国民へ紹介するという作業は、新しい視点をもたらした。また、ベトナムの臨床研究グループによるプレゼンテーションでは、今回のグループワーク開始時よりも内容が洗練され、上達が見られたことに感心した。安村講師からの各研究へ対する助言は、素晴らしかった。(伊関 千書)

福島オープンセミナーで講師をつとめた。セミナーの構成は、馬目講師が東日本大震災とその後の福島の状況について、安村講師が県民健康調査について、そして黒田が被災したコミュニティでの活動について報告をした。講義後にも質疑が続き、ベトナムの医学生および医師に福島のことを学んでもらう貴重な機会だったと考える。また、滞在最終日に Dong Nai 省の病院に派遣されている青年海外協力隊隊員2名と意見交換をする機会があり、派遣先の病院の医療環境、そして学んだことについて聞き取りを行った。(黒田 佑次郎)



福島のことを学ぶ研修生



馬目講師による講演



学長からの挨拶



テストと事後アンケート



グループワークの発表①



グループワークの発表②



フロアからの質疑



安村講師の講評



成績優秀者の表彰



JICA からのスピーチ

総括

登録した 119 名のうち、試験を受けて終了したのが 99 名（83%）であった。また、グループプロジェクトは 4 件中 4 件が、最終的なプレゼンテーションまで到達し、熱心なディスカッションが行われた。

最終日には、日本人講師とベトナム人講師によるサマリーミーティングが行われた。事業評価の担当者が、参加者へのインタビューの結果をフィードバックし、さらにフォーカスグループを行い、組織・受講者・講師・システムそれぞれのレベルで、どのような行動変容があったのか等を話し合った。ベトナム人講師からは、新しい教育のスキルが学習できたこと、そして複数の組織の関与があったことが報告され、参加者のみならず講師、ひいては組織までにも本研修による波及効果があったことがわかった。

（黒田 佑次郎）

ハノイ関係機関訪問報告

8月2日(日) ハノイ医科大学にて

Dr. Le Tran Ngoan (Hanoi Medical University, Dept. of Occupational Health)、Drs. Duong Ngoc Cuong、Dang Vu Phuong Linh (Hanoi School of Public Health) とミーティングを行い、共同研究に関する可能性について協議した。

8月3日(月)

1) JICA ハノイ事務所

NGO-JICA Japan Desk Coordinator の磯村 望氏、Senior Program Officer の Chu Xuan Hoa 氏、Trinh Thuc Thanh Thuy 氏と面会し、本プロジェクトの概要およびコース VI の進捗状況について説明した。JICA 側からは、プロジェクト目標 6 にある「住民・患者の声を直接サービス向上に反映できるデータが提示できる」について質問があり、今年 11 月の TOT で質的研究手法に関する研修を行う旨を伝えた。また、これまでの研修がホーチミン市医科薬科大学で継続されていることから、大学の選択科目の credit としての可能性はないのかとの質問を受けたが、現在のところは、対象を臨床医としていることからホーチミン市医師会の生涯教育として認定を受けていることを回答した。研修コース参加者の EBM への認識および知識の向上が確認できる一方で、この成果を最終的に住民・患者の保健・医療サービス向上に今後どのようにつなげていくかが課題であることを確認した。

本プロジェクトは今年度が最終年度であることから、今後、新たに JICA の支援が得られる可能性についても相談したところ、草の根技術協力事業としての申請に関しては、これまでのように単なる研修対象者の拡大というだけでは厳しいことが予想され、これまでの成果を踏まえて新たな展開が必要であること、これまでの実績および HCMC との信頼関係も確立されていることを考えると、パートナー型事業としての申請を検討しても良いかもしれないとの助言を頂いた。JICA では今年度より事業の見直しにより、予算規模の比較的小さいパートナー型の事業でも可能となっている。

2) RTCCD

Director の Dr. Tuan と Deputy Director の Dr. Ha と面会し、本プロジェクトのコース VI の進捗状況について説明した。RTCCD は現在、ベトナム北西部の山岳地帯にある North-West 大学医学部創設のアドバイザーとして関わっており、近日中に同大学と MOU を交わす予定である。現地の地域医療に携わる医師の協力を得ながら、地域医療に重点

をおいた医学部を目指しており、Dr. Tuan からは本プロジェクトのメンバーに技術的な協力の可能性について検討の要請があった。

3) ハノイ公衆衛生大学院

本プロジェクトで作成した教本（ベトナム語版）の厚生省推薦を受ける際に、ハノイ公衆衛生大学院の Ha 学長にご尽力頂いており、感謝の意を伝えた。その後、公衆衛生ラボの室長 Dr. Cuong および Dr. Linh にも面会し、今後、どのような分野で共同研究が可能であるか協議した。

(郡山 千早)



ハノイ医科大学での打ち合わせ



JICA ハノイ事務所への訪問



RTCCD への訪問



ハノイ公衆衛生大学院への訪問

報告担当者

黒田 佑次郎（福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座）

伊藤 慎也（福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座）

伊関 千書（福島県立医科大学会津医療センター）

知識 美奈（福島県立医科大学附属病院総合周産期母子医療センター）

郡山 千早（鹿児島大学医学部人間環境学講座疫学・予防医学）